

地場の原料、技法を守り
愛され続ける和紙を



原料となる楮は、釜で蒸した後に表面の黒皮をはぎ取る。この作業は主に一則さんの母、テイさんが担当。黒皮をはぎ取った楮は、束にして約1週間天日乾燥する。東和町産の楮は他地域よりも丈が短い分繊維も短く、柔らかい紙質になるのだという。



ドロドロの状態になった楮にノリウツギの糊を入れて混ぜたら、紙すきの工程へ。簾と桁を前後に揺らしてすく方法を「流しすき法」と呼ぶ。簾に付いた紙は、まだ水分の多い状態。慎重にはがして重ねていく。

最北の和紙

「シャツ、シャツ」。けたと簾を揺らす度に、水が小気味よい音を奏でる。紙すきの作業風景は、花巻市東和町の冬の風物詩ともいえる。原料が暑さに弱いこともあり、寒さの厳しい1月から3月頃までしか行われない。作業場に立つのは、今年で57歳の青木一則さん。青木家は代々和紙の生産に携わってきた。

東和町成島で作る和紙は、「成島和紙」と呼ばれている。その紙質は、素朴でいて味わい深さがある。くわ科の落葉低木「楮」の皮を原料として「ノリウツギ」の糊を合わせ、寒中にすき上げることで独特な風合いが生まれる。和紙の産地は「越前和紙」「美濃紙」「土佐和紙」など西日本に多く、「成島和紙」は日本最北の和紙といわれる。

技術と品質の力

はじまりは寛文元（1661）年以前。生産していたのは、畑作・稲作をしていた農家の人たちだ。和紙は南部藩の御用紙や障子紙、提灯の紙に使われ、冬の収入源になっていた。

時は流れ、時代は明治へ。欧米か



東和町産の楮を原料にした和紙は、素朴な風合いと柔らかな紙質が特徴。書道家や民芸品関係者など長年愛用しているお客さんも多い。



店内の一角には成島和紙を使ったハガキや名刺台紙などを販売するコーナーもある。和紙の原料として楮の他に「みつまたの木」を使うこともあり、光沢のある紙質になる。主に名刺台紙に使われている。

ら日本に洋紙技術が伝わる。機械によつて大量に製造でき、和紙よりも安価であることから洋紙の需要が高まってきた。ピーク時には成島和紙の生産に50数件、120人近くが携わっていたが、次第に減少。時代に抗うことはできず、昭和30（1995）年頃には青木家だけになってしまった。

なぜ青木家は残ったのか。その理由には技術の高さと品質重視の姿勢にある。和紙は楮という植物が原料となるが、地元産の楮にこだわり100%使用を貫いていたのは青木家だけだったという。

り着けない。苦悩する日々が続いた。諦めかけていた時、嬉しい知らせが届く。地元のテレビ局に、良博さんの作業風景を録画した映像が残っているという。

「父の技法を確認できると喜んだのですが、送られてきたビデオテープは家庭用としてあまり普及していなかったベータのタイプで（笑）。自宅で見られなくて困っていたら、近所の電気屋さんが見せてくれたんです。その映像がヒントになりました」

紙すきの技法は、数値化されていない。父、良博さんの映像はあくまでヒントであり、厚さを自在に調整でき

そんな青木家でも、注文の減少によつて生産を中断していた時期がある。成島和紙の伝承が途絶えるかと思われたその時、とある注文が入る。昭和45（1970）年、大阪万博へ和紙を草木染めにして出品したいという依頼だった。珍しい要望であったが、一則さんの父、良博さんは繊細な色合いが表現できるように懸命に取り組んだ。すると、万博で完成品を目にした人たちから「私も同じものがほしい」という注文が次々と入る。成島和紙に再び息が吹き込まれた。

るようになるには、経験を積む以外に方法はなかった。何度も何度も地道に作業を繰り返して、目には見えない自分だけの感覚を体に染み込ませた。一則さんはこれまでを振り返り、「お客さんに育てられた」と語る。「仕事を始めて最初の頃は、書道家の方々に紙質を気に入っていただき、よくご注文をいただいていた。平成に入ってからはお面の台紙など民芸品関係の注文をいただくようになりまし。ご要望を聞いて作成し、感想を聞いて改良を重ねる。お客さんに育てていただいたおかげで、技術を磨くことができました」

るようになるには、経験を積む以外に方法はなかった。何度も何度も地道に作業を繰り返して、目には見えない自分だけの感覚を体に染み込ませた。一則さんはこれまでを振り返り、「お客さんに育てられた」と語る。「仕事を始めて最初の頃は、書道家の方々に紙質を気に入っていただき、よくご注文をいただいていた。平成に入ってからはお面の台紙など民芸品関係の注文をいただくようになりまし。ご要望を聞いて作成し、感想を聞いて改良を重ねる。お客さんに育てていただいたおかげで、技術を磨くことができました」

るようになるには、経験を積む以外に方法はなかった。何度も何度も地道に作業を繰り返して、目には見えない自分だけの感覚を体に染み込ませた。一則さんはこれまでを振り返り、「お客さんに育てられた」と語る。「仕事を始めて最初の頃は、書道家の方々に紙質を気に入っていただき、よくご注文をいただいていた。平成に入ってからはお面の台紙など民芸品関係の注文をいただくようになりまし。ご要望を聞いて作成し、感想を聞いて改良を重ねる。お客さんに育てていただいたおかげで、技術を磨くことができました」

自然体のままで

成島和紙を作り続けて四半世紀が過ぎた。東和町には和紙工芸館が建てられ、一則さんが館長を務めている。同施設では成島和紙の技法を見学できる他、「溜すき法」という方法で、手軽に和紙を製作することもできる。

また、地元の子どもたちに成島和紙を身近に感じてほしいとの思いから、和紙による保育証書や卒業証書の製作も手がけている。



花巻市内の保育園児を招いての紙すき体験の様子。一則さんの説明を聞いた後、それぞれ好きな色の原料を選び、梓の中へ3回に分けて流し込む「溜すき法」で仕上げた。



成島和紙工芸館

〒028-0116
岩手県花巻市東和町北成島5-202
TEL 0198-42-3948
営業時間 10:00~16:30
定休日 月曜、年末年始
料金 紙すき体験 1枚1,000円(税込)

成島和紙と向き合う。

一則さんは今後について、次のように語る。「成島和紙の伝統を絶やしたくはない。だからといって無理にでもというわけではなく、注文がなくなったらそこまで、という潔さも自分の中にあります。今までも、書道家の方々からの注文が減り、続けられないかなど感じたこともあります。でも、そういった状況になると、民芸品関係の方々であったり、不思議と別のところからの注文が増えるんです。本当にありがたいことです。これからも、成島和紙を使いたいという方がいる限りは作り続けていきます」

突然の後継

一則さんは高校卒業後、叔父の営む家具製造会社に就職した。良博さんは早く技法を覚えてほしかったが、家具作りは知れば知るほど奥深くて面白く、成島和紙を継ぐのはまだまだ先でも良いと思っていた。ところが、良博さんが不慮の事故で急逝。仕事場には、手付かずの注文がいくつも残っていた。誰かがやらなければ。一則さんは叔父の会社を辞めて、父の跡を継ぐことに決めた。良博さんは享年50歳、一則さんが20歳の時のことだった。

成島和紙の技法を直接教えられたことはない。だが、和紙を作る父の姿は目に焼き付いていた。父を手伝っていた母、テイさんの助言も聞きながら、一則さんは紙の形状に仕上げることができるようになった。しかし、紙の厚さをうまく調整できない。料理に例えるなら最後の味付け部分だ。調味料の微妙なさじ加減で美味しくも不味くもなる。ちよつとしたコツで厚さを調整できるはずなのだが、それがわからない。思いつくことは何でも試してみた。それでも答えにたど